

伝統を受け継ぐ

「印伝」の新しい挑戦

軽くて丈夫な鹿革は、古くから生活用品などに用いられ、戦国時代には武将たちの武具や鎧よろい・兜かぶとなどにも使われてきました。かつて全国に普及していた鹿革の加工品が、印伝として山梨の地場産業となったのは、江戸時代に甲府市の老舗「印傳屋」の遠祖・上原勇七が鹿革に漆で模様を付ける独自の技法を創案したことが始まりといわれています。印伝は、粋を競う江戸の町人たちの間で人気を博し、愛用品として広まっていきました。以来400年以上の歴史を刻み、昭和62（1987）年には国の伝統的工芸品「甲州印伝」に指定されています。そんな印伝の歴史は、進化の歴史でもあります。伝統を受け継ぐだけでなく、常に新しさを追求してきたからこそ、今も人々に愛され続けているのです。

伝統技法を守りながらも、新しさを追求
「不易流行」の実現

「定番商品に加え、毎年新しい企画による商品を発売するほか、オリジナルブランドの創出や海外のラグジュアリーブランドとのコラボレーションにも取り組んでいます。西洋で漆は『japan』と表

INDEN EST.1582 NY 東入A Rippiéal

白い更紗と黒漆で織りなす模様は「市松」から派生したデザインで、日本らしさとモダンな印象が共存し、人気が高い

記され、日本文化を象徴する素材でもあり、印伝は近年海外でも注目を集めるようになりました。ラグジュアリーブランドはこだわりも強く、柄などに関するチェックも厳しいですが、海外の感性に触れることは、私どもにとって良い刺激となり、技術革新につながる部分もあります。

印伝の伝統技法には、模様の色ごとに型紙を替え、多色使いの模様が表現できる『更紗技法』、太鼓と呼ばれる筒に鹿革を張り、藁をたいていぶし、茶褐色系の色と模様を施す『燻べ技法』、染め上げた鹿革の上に型紙を載せて漆を刷り込む、印伝において最も代表的な『漆技法』があります。これらの伝統技法は古来より受け継がれてきたものであり財産ですから、決して無くすことはできません。伝統を守り、それを生かして、新しさを追求する『不易流行』の実現こそが、伝統産業にとって大切なことだと考えています」

世代を超えて愛される
甲州印伝を目指して

「近年は、小売店さまや問屋さまを応援するという立場から、自社で販売するものとは別に、お取引先さまのオリジナル商品の製造を請け負うこともあります。そんな中、山梨の地域資源を若い女性の視点でプロデュースしている地元の女子大生グループ『モモハナ』の企画による商品にも協力させてもらいました。モモハナの企画は、若い女性が印伝を手にしたくなるようなかわいらしさのあるデザインで、印伝の



株式会社 印傳屋上原勇七 代表取締役社長

上原 重樹 さん

株式会社 印傳屋上原勇七
甲府市川田町アリア201
TEL.055-220-1660
(本店)甲府市中央3-11-15
TEL.055-233-1100



アメリカで展開されている「INDEN EST.1582」シリーズの商品。1582は印傳屋の創業年を表している



県特産のモモと印伝の定番のトンボ柄をあしらった
「モモハナ」プロデュースによる印伝

魅力の広がりを感じました。

自社の製品については、時代のニーズを捉えながらも、あまり細かい流行は追うことなく、長く愛用していただける商品でありたいと考えています。一度購入したら、何年も安心して使っていたら、使い込むほどに手になじみ柔らかな風合いになる、鹿革の使い心地の良さを感じてほしいと思っています。

鎧・兜から始まり、時代と共に作るものは変わってきましたが、伝統的技術、技法を使った地道な積み重ねが今につながっているのだと思います。長い歴史の中の数十年を私どもが担当させてもらっているわけですから、昔から引き継いだものを後世に伝えていく責任と義務があると、私は感じています」